田舎者の英文学

——二〇世紀イギリスの「文化」とその地政学

論文要旨

河野 真太郎

田舎者の英文学――二〇世紀イギリスの「文化」とその地政学

論文要旨

河野真太郎

本論は二〇世紀イギリスの文学（モダニズムから戦後にかけての小説と詩）、戦間期から戦後にかけての文化論を対象とするものである。本論は二〇世紀を通じて変化した認識地図が、様々な意味での「文化」、そしてリベラリズムの問題と深くかかわりあっていることを示しつつ、その変遷が、主に新自由主義として定義される現代の系譜を構成していることを示すものである。

本論の主題には四つの柱がある。ひとつめは表題の「田舎者」と「地政学」に含意されるものである。本論が対象とする二〇世紀の文学と文化は、二〇世紀を通して変容していった地政学的想像力、または認識地図によって大きく規定されていた。田舎／都会（そして郊外）、メトロポリス／帝国、そしてグローバリゼーションと、想像上のものであれ実践上のものであれ、二〇世紀の経験は様々な空間的な経験であっただろう。そしてそれは、個人的な経験であるとともに社会的な経験でもあった。例えば田舎から都会へと地理的移動をする個人の経験、はたまたメトロポリスの街路にまみれながら田舎を想像する経験、これらの経験は、いかなる歴史性のもとにあったのか。

この地理的な移動と地政学的な想像力には、「文化」の問題が解きほぐしがたくからまりついてくる。例えば日本で「上京」と呼ばれる地理的な移動は基本的には教育を受けるためのものである。（就職するためという場合もあるが、それが現在典型的ではない。）つまり、メトロポリスには教育が、教養が、文化があるという観念のもとに人は故郷を去る。しかし、それでは故郷に「文化」はないというのかといえば、そんなはずはない。「田舎」にもメトロポリスとまったく同じように人が暮らしているのであり、従ってそこには文化がある。それにしても少なくとも「上京」する人間は、故郷にはない「文化」を求めて移動をするである。その移動の背景には、ヒエラルキーをともなったある「文化の地政学」がある。そのヒエラルキーとは、いかなる経験が「文化」であり、いかなる経験がそうではないのか、という選別のヒエラルキーである。タイトルの「英文学」には、そして副題にある括弧付きの「文化」にはそのような意味がある。かくして、地政学的想像力のあり方は、文化の問題と同時に検討されなければならない。これが本論の第二の柱である。これら二つの柱を別の言葉で言えば、地理的移動(geographical mobility)と階級移動(class mobility)の輻輳とも言えるかもしれない。

そこから本論の第三の問題意識が帰結する。それは「リベラリズム」である。個人的な経験にこと寄せれば、少なくとも私の世代にとって、教育とはリベラルなものであった。それはまさに蒙を啓いてくれるものであり、自由を与えてくれるものであった。これはおそらく非常に原初的なリベラリズムの定義であろう。本論で扱う多くの人物たちが経験した時代は福祉国家の勃興期から最盛期である。その時代

においてリベラリズムは教育機会の平等化やその他の生活の多くの面における民主主義化という肯定的な側面も持っていた。しかし「新自由主義」として定義されることもある現在、自由とは市場における競争の自由であり、決して強い福祉国家が保証する自由ではない。（このような言い方の抽象性にも十分注意が必要だが。）だが、それさえも歴史的なものである。イギリスにおけるリベラリズムの系譜には、現在の新自由主義を否定的に規定するものもあれば、すでに忘れ去られた肯定的なものも埋まっていないか。そしてその文化との関係はいかなるものか。

英文学を勉強するにつれて、私はこういった問題意識の根が、すなわち私たちの現在を規定する様々な観念や想像の根が、二〇世紀イギリスの文学・文化のそこかしこに見いだせることに気づいた。それが、本論の第四の柱である。つまり、本論はモダニズム文学、戦後のいくつかの小説、一九三〇年代から一九九〇年代にわたる文化論のテクストを対象とするが、それらはすべて現在性を構成する系譜として読まれている。その現在性とは具体的に何かといえば、それは地理的にはグローバリゼーション、政治思想的には新自由主義、労働の観点からはポストフォーディズムなどと名付けられることになるであろう。そういった現在がいかにして作り出されたのかを理解するために本論でもっとも重視するのは、レイモンド・ウィリアムズの言う「文化と社会」の分離の過程である。マーガレット・サッチャーの「社会なんて存在しない」という有名な言葉に象徴されるように、新自由主義は個人的なものと経済的なものとの間の中間的なもの、この場合は「社会」を否定する。これを違う観点で見れば、新自由主義においては、「社会」が文字通りに消滅しているのではなく、個人と社会との関係が徹底的に不可視にされているのである。そのために、社会の変化を構想する想像力にも決定的な制限が課されることになる。つまり、集団的な社会の変化がますます想像しにくくなるのだ。しかしこれは新自由主義がまったく新たな形で生じさせた状況ではない。そのような状況を生み出した系譜は、少なくとも二〇世紀全体を視野に入れて考えられるべきであるし、さらにはウィリアムズの『文化と社会』が論じる産業革命以降の近代史全体の問題となるであろう。そのような意味で、本論が目指すのは「文化と社会」の系譜学だということになる。そのように言う時の「と」は分断を表すと同時に可能な接続も表す。文化と社会が分断され、その分断が私たちの閉じ込められた閉域を作り出す様を跡づける否定的な系譜学と、それらが残滓的な形ではあれ分断されていない思考あり方の系譜をたどる肯定的な系譜学。本論の理想はこれら二つの系譜学を行うことであった。ただし、終章で述べるように、その理想は一種の挫折をこうむらざるを得なかった。

本論は三部からなっている。第一部は長い序章として読まれるべく編まれた。第一部に収めた二つの章は、見方によっては非常に異質に見えるかもしれない。第一章はレイモンド・ウィリアムズを基礎として、どちらかといえば内在的に、ここまで述べた四つの柱の絡まり合いを示しているのに対して、第二章はフレドリック・ジェイムソンの議論に依拠しつつジョウゼフ・コンラッドからＪ・Ｇ・バラードにいたる文学作品を読み、二〇世紀の認識地図の変容をどちらかといえば超越的に記述している。この内在性と超越性の混淆によって、本論全体の特徴を示しつつその主題を準備したつもりである。本論では第一部に登場するレイモンド・ウィリアムズとフレドリック・ジェイムソンが度々参照されるが、本論の隠された主題はこの

近くて遠い二人のマルクス主義批評家との対話でもある。

第一章は批評家・小説家のレイモンド・ウィリアムズにとって「ウェールズ経験」が重要な基礎となっていることを主張しつつ、それによって近代の経験においてウィリアムズが経験したような地理的・文化的移動が一定の普遍性を持っていることを主張するものである。この場合の「ウェールズ経験」とは回復されるべき理想郷としてのウェールズではない。本章で「ウェールズ経験」と呼ぶのは、田舎から都市への移動と、それにともなう文化的な分断の経験の総体である。この分断の問題は、「経験」そのものの近代性の問題でもある。近代における経験とは、いやおうなくウィリアムズの言う「二重視」の経験でもある。本論では夏目漱石の『三四郎』とウィリアムズを比較することを通じてこういった問題を検討する。

第二章で検討するのはジョウゼフ・コンラッドの『闇の奥』と、Ｊ・Ｇ・バラードの『結晶世界』および『クラッシュ』である。本章では二〇世紀の地政学的な想像力の問題を、帝国主義から後期資本主義へ、という歴史性において考察する。『闇の奥』における認識論的枠組みは高度にモダニズム的＝現象学的だと言える。それは認識の臨界点を徹底的に、つまり最終的には象徴による解決を必要とする地点まで追究する作品である。本章ではフレドリック・ジェイムソンの議論を参照しつつ、それを帝国主義下における認識の枠組みだと考える。それに対して、『闇の奥』と非常に似通ったモチーフを扱う『結晶世界』にはそのようなモダニズム的＝現象学的認識は見られない。これも、ジェイムソンの枠組みによれば、即時情報伝達と金融資本が支配的となった後期資本主義へと歴史化できるだろう。その観点から、『結晶世界』と『クラッシュ』はいずれも空間性の零度を志向するという点で共通している。

第二部はイギリスのいわゆるモダニズム文学を対象としている。扱われる作品は時代順には並んでいないが、章の並びの基準となっているのは地政学的なトポスである。つまり、第二部は都市文学から出発し、そこに「田舎と都会」のトポスが侵入する様を検討し、さらには「田舎（または郊外）と都会」のうちにグローバリゼーションや「文化と社会」の分離の問題が忍び込む様相を検討する。

第三章では現在ほぼ無名であるモダニズム詩人ホープ・マーリーズの『パリ』を紹介・検討する。『パリ』はその名の通りの都市文学・フラヌール文学の作品である。しかし、そこには同時勃興していた人類学的な知見が採り入れられており、都市文学は、基本的な問題構成として、そのうちに「田舎」（この場合パストラル的なもの）を組み込むものであることが示される。第四章で論じる『ダロウェイ夫人』にも同じことが言える。そこには都会と田舎（または田園）の対立が書き込まれているが、「保守的な田園礼賛言説に対立するラディカルなモダニズム都市文学」という見方では見落とされるものがあることを考察した。モダニズム都市文学は田園に対立する都市経験を称揚するのではない。それは「都市の田園化・パストラル化」を志向する。

これらの考察は、第五章の『ハワーズ・エンド』論で一種の再検討を加えられている。そこでは、都会と田舎という要素はイデオロギー素にすぎないものとして見られ、それらによって作り出される閉域から抑圧排除される歴史性、すなわち萌芽的グローバリゼーションが問題にされる。フレドリック・ジェイムソンは『ハワーズ・エンド』における「無限」という言葉に、表象不可能な植民地の症候を見いだ

し、この作品を帝国主義へと歴史化する。しかしこの作品における交通機関（自動車と鉄道）の対照的な形象は、石炭から石油へのエネルギーのシフトを背景としている。郊外化するハワーズ・エンド邸の形象もその文脈で考えられるべきであるが、同時代の田園保存言説などを参照することで、それは郊外化と勃興的グローバリゼーションの問題へと接続されるだろう。本章ではカズオ・イシグロ『日の名残り』との比較によってそれを検討する。

第六章では、第四章での議論を「マニフェスト」「前衛」という観点から捉え直し、文化秩序を問題とする第三部への橋渡しとして、都市の経験を描く文学が「文化と社会」（レイモンド・ウィリアムズ）の問題を、さらには都市群集に対する「自由な個人のアソシエーション」というリベラルな集団性の問題をはらむ様相を考察した。イタリアの未来派（マリネッティ、アザーリ）とイギリスの正典的モダニズム（ウルフ）は、その同時代性にもかかわらず比較されることは少ない。しかし、その、アヴァンギャルドとモダニズムとの分離そのものが、アヴァンギャルドそのものに加えられた分離（政治と美学の分離）の反復ではないか。本章では両者で重用される「飛行機」の形象を導きの糸にそのことを考察する。

第三部は文化論（章によってはメタカルチャーや Kulturkritik と呼ばれるもの）の系譜をたどる。気づかれるかもしれないが、第三部は第二部に対する応答という側面をもっている。第二部で扱うのはかなり正典的なモダニズムの文学作品であるが、その中にも見いだせる文化への自意識、文化秩序へのメタカルチュラルな意識を歴史化するためには、言説のレジスターを広げて同時代、さらにはそこから現代にまでいたる文化論を考察することが必要であった。その文化論の系譜はやがて「メリトクラシー」をキーワードとする、教育を中心としたリベラルな社会変容の問題へと接続していく。そのようにして醸成された感情構造の多くの部分を現代の私たちは共有しているのだが、グローバリゼーションに対応する新自由主義のもとでそういった感情構造はその解放性を失っていく。いやむしろ、かつては解放性を備えていたリベラリズムが「反転された革命」となって現在を創出した系譜が存在すると述べた方が正確であろうか。第三部のプロジェクトはそのような「反転された革命」の系譜学である。

第七章は一九三〇年代の「文化」をめぐる言説の歴史化を目指す。プリーストリーやウルフの「ブラウ」をめぐる論争に表れているように、三〇年代イギリスでは文化秩序をめぐる言説闘争が行われていた。これはしかし、一国内の単なる階級闘争とだけ捉えられるものではない。そこで本章では、Q・D・リーヴィスの『小説と読者大衆』に注目する。ジェド・エスティの議論に従えば、三〇年代の文化をめぐる論争はエスティの言う「レイト・モダニズム」つまり帝国の縮小から小英国のナショナル・カルチャーの再想像へ、という歴史性をもっていたことになる。しかし本論では、リーヴィスによるイギリス領ホンジュラスへの言及をヒントに、リーヴィスの文化論が単にイギリスのナショナル・カルチャーの再定義をのみ目指していたのではなく、二〇世紀型の「帝国」つまりアメリカ合衆国の覇権との緊張関係にあったことを解き明かす。

第八章は時代を第二次世界大戦後に移し第七章での「文化論争」の系譜をさらにたどる。本章でまず注目されるのは、C・P・スノウの「二つの文化」講演とそれをめぐるF・R・リーヴィスの批判である。この論争は自然科学と人文科学との間

の溝と対立という表面的な水準で見られるべきものではなく、戦後イギリス社会全体の変化の諸相を反映していると見られるべきものである。その諸相のうちでももっとも重要なのは、スノウの議論が戦後福祉国家における教育機会の拡大にまつわるものであり、スノウは単に自然科学を擁護していただけではなく、メリトクラシーの擁護をしていた点である。その点において、下層中産階級出身のリーヴィスとスノウはリベラルなメリトクラシーという同じ土俵の上で論争をしたと見ることが可能である。しかし、このメリトクラシーにまつわる感情構造は新自由主義の時代にあって市場での自由競争を肯定する感情構造へと収奪されていく。それを典型的に示すのが、一九九〇年代版の「二つの文化」論争たるソーカル事件である。この論争の系譜は、ウィリアムズが論じた「文化と社会」の分離の系譜に一致する。本章ではウィリアムズ自身が実践した成人教育の理想のうちに、この文化と社会の分離を学び去るための失われた可能性を求める。

第九章は第八章でも論じたナンシー・フレイザーの「承認と再分配のジレンマ」を「文化と社会」の系譜の現代的な表れとみなし、その系譜をフェミニズム思想と実践とを軸にたどっていく。まずは一九七〇年代初頭にイギリスで隆盛した「要求者組合」運動とその基礎所得（ベーシック・インカム）の主張に、承認と再分配の問題を一挙に解決せんとする志向を見いだす。しかし要求者組合は、それまでの組織労働者から排除された人びとをアソシエーション的に結びつける共同性の組み方という点で、その後のポストフォーディズム体制を準備するものとも捉えられる。そこで本章はその系譜をさらにさかのぼり、ヴァージニア・ウルフの『自分自身の部屋』と『三ギニー』、そして『三ギニー』に対するQ・D・リーヴィスの批判に注目する。ウルフが『三ギニー』で主張する「アウトサイダー協会」には要求者組合的な共同性が見いだされるが、それをリーヴィスが批判するのは、メリトクラシー下で身を立てた中産階級として、不労所得階級（の残滓）のウルフが主張する労働観を許容できないがためであった。ウルフの主張する労働観がポストフォーディズム的なそれに似ているなら、リーヴィスは（福祉国家的な）ワークフェアを主張するのである。しかし、現在の新自由主義を構成する感情構造はこの論争の両者を系譜としていることを本章は主張する。新自由主義はリベラルなメリトクラシー（リーヴィス）の残滓のみならず、ウルフ的な個人主義とラディカルなリベラリズムをもその感情構造の一部に取りこんでいるのである。